

時代を映す大学祭 「名古屋大学「名大祭」の変遷」

山口 拓史

(名古屋大学文学書資料室助手)

一 はじめに

名古屋大学では、今年も例年どおり六月初旬に東山キャンパス(名古屋千種区)をメイン会場として名大祭が開催された。第四六回となる今年の名大祭テーマは「道草」で、開催期間は六月二日から五日までの四日間であった。ここ数年の名大祭参加者は約四万人規模であり、名大祭が地域住民との交流の場として広く定着していることを示している。

本稿では、大学祭の一事例として名古屋大学の名大祭を取り上げ、その誕生経緯や約半世紀におよぶ変遷を概観することにしたい。本稿を通じて、大学祭という視点からの学生文化史の一端を読み取っていただければ幸いである。

なお本稿は、拙著『名大祭―四〇年のあゆみ―』(名大史ブックレット7、名古屋大学史資料室刊、二〇〇三年)をもとに、同書刊行以降の動向を踏まえて加筆修正を行ったものである。

二 名大祭誕生の背景

第一回名大祭は、昭和三五(一九六〇)年六月に開催された。当時のプログラム冊子(以下、パンフレットという)には「名古屋大学主催・名大祭実行委員会主管」と明示されており、当初から名大祭管理運営の実質が学生(名大祭実行委員会)に委ねられていたことがわかる。同パンフレットには、名大祭実行委員長による次のような巻頭言が掲載されている。

今年こそ、それをつき破って、名古屋大学史上初のフェスティバルを……催すことになりました。

この文章からは、名大祭を全学的フェスティバルとして開催することへの強い期待と喜びを感じ取ることができる。当時、名古屋大学では工学部をはじめとして経済学部や法学部の東山地区移転が実現し、昭和三五年春には東山地区のシンボルたる豊田講堂が完成するなど東山キャンパスの整備・拡充が着々と進められた時期であった。したがって、東山キャンパス集結という地理的環境が整う中で、従来は各部局がそれぞれに開催していた文化祭や体育祭を全学統一的な形で開催することが可能となってきたということが、名大祭誕生の前提条件の一つとして存在したといえることができる。

しかし、単なる地理的環境の改善という要因のみで名大祭の誕生を説明できるわけではない。ここでは、名大祭誕生の時代背景として、いわゆる「六〇年安保条約改定」問題と伊勢湾台風災害の二つを指摘することができる。

前者については、当時全国的な規模で安保条約改定阻止運動が繰り広げられ、名古屋大学でも教養部学生自治会が中心となった学生運動が展開され、多くの教職員・学生もそうした運動に積極的に参加するという状況があった。ま



第46回名大祭・豊田講堂の様子

名大は俗に「タコの足大学」と言われているように、全学がまとまって一つのことをするのはとてもむづかしいことです。毎年、何かあるごとに、その地理的な不便と全学的組織のない悲哀をつくづく感じます。しかし、

表 名大祭テーマ一覧(1~18回)

回	年	メイン	サブ
1	1960	日本人民のエネルギーの継承と発展の方向を求めて	日本人民の歴史づくりのために
2	1961	日本人民のエネルギーの継承と発展の方向を求めて	変革の時代における学生の立場と役割
3	1962	戦後史を足がかりに現代における大学の役割と学生の生き方を求めよう	新しい名古屋大学づくりのために
4	1963	祖国に平和を 大学に民主主義を きなくさとせちがらさをつけて 人民の輪の中に私たちの未来を築こう	私たちの新しい生き方を見いだすために
5	1964	胎動から躍動へ 祖国の痛みがさらにはげしくうづく今 ぼくらの連帯は巨歩を進める、さらにもう一步前へ	民主的学問、民族性豊かな文化を創造する中で
6	1965	大学に新しいいぶきを ゆれ動く世界の中で 岐路に立つ我ら 逆流に抗して人民の輪を広げよう	生活に根ざした文化、平和のための学問を追求する中で
7	1966	築こう平和と真理のとりでを 嵐の中のアジア・祖国日本 深まりゆく大学の危機について 僕ら連帯の輪をさらに広げよう	大学が真に民族の課題に応えるために
8	1967	はばだけ創造のつばさ 反動の嵐の中 たちあがる人民と呼びかわし 学問・文化に力強い生命を	祖国の平和と豊かな学園生活をめざして
9	1968	この祖国に平和と民主主義を 我ら真理のとりでを築くもの たぎる力をよりあわせ 歴史をになう人民の隊列へ	学問・思想の自由を守り、「明治百年祭」を批判するなかで
10	1969	磨け 祖国切り拓く 科学のメスを 我ら真理の磐きずくもの 従属の鎖たちきる 統一の力今こそかたく	自主的活動を追求し、大学民主化を推進するなかで
11	1970	変革にいどむ青春	新しい歴史厳粛に迎える我ら 真理への情熱を燃やし 統一と団結の鉄槌を鍛えん
12	1971	怒れ知性燃えあがる日本列島	真理究めるわれら 逆巻く濁流について 平和と民主主義の統一をめざさん
13	1972	高らかに歌え! 青春の叙事詩	迫りくる嵐そして濤 我ら勇敢な「海つばめ」たらん
14	1973	日々新たなる青春の復権を	生ける科学の草の根よ 雄々しく育て 行く手を阻む 巨岩を砕け
15	1974	大学ににんげんのうたを	それは模索し発展する科学のうた 培い励まし合い国民のための日本をつくる変革のうた
16	1975	ひきしほれ青春の弓	射よ嵐の目に 熱き鋼の矢を
17	1976	響け われらの Rond	吹きぬける科学の烈風 黒雲を裂け わきあがれ大地に 建設のエネルギー
18	1977	湧きあがれ 学問と変革のシンフォニー	ひたむきな歴史の探索と 確信への追求から 今生み出される明日への 飛翔 我が学舎と 当惑する祖国に

た後者については、「昭和の三大台風」に数えられる伊勢湾台風によって、愛知・岐阜・三重の東海三県に甚大な被害が出て名古屋大学も校舎損壊や教職員・学生の被災で半月以上も授業や試験が中断され、教養部文化祭も中止されるという事態となった。こうした中、被災直後から救済活動を開始していた教養部学生自治会では教養部学生災害対策本部を設けて延べ三〇〇〇名の学生参加を得て積極的な救済活動を展開したのであった。

名大祭の誕生は、キャンパス集結という地理的条件に加えて、こうした二つの時代背景(安保条約改定をめぐる全国的な社会状況と伊勢湾台風災害とその救済活動という東海地方固有の社会状況)を契機に高揚した学生運動のエネルギーが全学的に結集されたことで実現したという側面を有していると考えられるのである。

三 名大祭の変遷

昭和三五(一九六〇)年に誕生した名大祭では、開催年ごとにテーマが設定されることになっている。以下、名大祭テーマ(表参照)に着目して、その変遷を追うことしたい。

(一)一九六〇年代

この時期のテーマは、学生運動との深い結びつきを基本に、国内外の情勢も視野に入れた様々な政治的・社会的問題に敏感に反応したものであった。

当時、名大祭は、学生の様々な要求実現の場であるとともに、学外一般市民との交流あるいは連帯の場と位置づけられていた。第二回パンフレットに寄せられた、「名大祭は読んで字が示すように、『おまつり』であります。人間は緊張の連続で生きられるものではありません。楽しみも織りこんだものであつてほしいと思います」との学長メッセージは、この時期の名大祭が一種の緊張感を有する場であったことを示している。

(二)一九七〇年代

この時期は、一九六〇年代と比較して、短いメインテーマと長いサブテーマという形で、「青春」や「歌」がキーワードになっている点に特徴がある。当時は、全国的な傾向として「大学紛争」が沈静化した時期であり、その点は名古屋大学も同様であった。

この時期における名大祭のテーマ表現は、明らかにそれ以前のものと異なったものとなっている。一九六〇年代のいわゆる高度経済成長期の下で受験競争社会をくぐり抜

表 名大祭テーマ一覧 (19~46回)

回	年	メイン	サブ
19	1978	我らの手で真の科学を	我ら数多なる知の泉、歴史の大河にそそぎ 深き流れとなりて逆流をつき破らん
20	1979	知を力に 逆風に対峙し奏でよう 変革の前奏曲	
21	1980	輝け 我ら知の銀河	押し寄せる暗闇 引き裂く若きエネルギー 込み上げる胸の疼き 熱き炎となりて未来を燃やし 学術文化と連帯の力たからかに 創り上げろ希望と変革の大地を
22	1981	われらとわれらの子孫のために	
23	1982	輝く地球と未来をわれらで	
24	1983	改造	
25	1984	反攻	
26	1985	刻みこめ 青春の鼓動を 新たな胎動に	
27	1986	熱帯雨林、諸子百家。	
28	1987	脱	
29	1988	我がまま開発	
30	1989	すばらしい	
31	1990	文明の育ての親と生みの親である。	
32	1991	未来への足跡	
33	1992	腐った鯛、原石のダイヤ	
34	1993	卵からかえる瞬間	
35	1994	種まいて、水かけて、	
36	1995	夢見る頃を過ぎて・・・今こそ動き出すとき	
37	1996	カニ	
38	1997	くさった学生。くさった教授。	真の大学改革を目指して
39	1998	崖っぷち	
40	1999	0からの創造	
41	2000	好きです、名大	
42	2001	白地図	
43	2002	飛翔	
44	2003	夢空間	
45	2004	活-iki-	
46	2005	道草	

(各年「名大祭パンフレット」より作成)

特集・学園祭

け、「大学紛争」を経験してきた当時の学生の真情がこの時期のテーマに込められていることは、各回のテーマアビールに示された次のような文言からも知ることができる。

人間らしく生きたい——僕たちはいつもそう思う。人間らしく生きる——こんなあたりまえにみえることが決して容易ではない、僕たちの時代。(第一四回)

どう見ても将来への展望がわいてこない社会の現状。不公平と不正が横行し、強い者はあくまで強く、弱い者が徹底的にいじめぬかれる今の世の中、真理の存在すらが疑わしくなる日常の生活で、……僕たちは今確かなものを掴みたい……(第一九回)

(三) 一九八〇年代

この時期は、サブテーマの消失を含めたテーマの簡素化に特徴がある。またそれに関連して、一九七〇年代以前の名大祭ではテーマ企画(年ごとのテーマに直接関連する名大祭の中心的企画)が縮小される一方で「オムニバス企画」と呼ばれる企画が増加している。

この時期の名大祭が、次第に抽象化されるテーマの下で、よい意味で統制されることもなく単にオムニバス的な傾向を強めていたことは当時の名大祭実行委員会が認めるところであり、当時の学長が懸念するところでもあった。この

時期のパンフレットに掲載された次の文章は、それを物語っている。

青年向けの情報誌や娯楽雑誌などに見られる、祭りとしての要素のみが強調されてきた大学祭像によって、ともすれば見失われがちな大学祭の役割を、私たちは、今、もう一度思い起こしてみなければなりません。(第二四回、実行委員長あいさつ)

諸君、今年の名大祭のテーマをえらんで「脱」という。それがたんなる逃避に非ず、消極的な過去の便宜的清算に非ず、むしろ飛躍して視野を広め、名実ともに充実し、自己を呪縛から解放し、以て大いにはばたく契機たらしめようとするためには、ここにいかなる祭典を持つべきか。テーマがいたずらに名大祭の実態から遊離し、たんなる飾りとして終わらないためにも、私はあえて名大祭の実態を諸君に問いたい。(第二八回、学長あいさつ)

(四) 一九九〇年代以降

この時期には「お祭り企画」と呼ばれる企画が登場し、その企画数の増加傾向は現在においても認められる。「お祭り企画」登場は、一九八〇年代後半ごろから顕著になってきた「名大生の名大祭離れ」を背景として、それに歯止めをかけるために「学生層を引き戻す、魅力ある名大祭つ

くり」が模索された結果であった。「お祭り企画」の登場には、当時の名大祭実行委員会が有していた一種の危機意識を読み取ることが出来る。

一方この時期の名大祭では、次に示すテーマアピールからも読み取れるように、単なる名大祭という枠を超えて大学のあり方を模索しようとする試みもみられた。

前回「くさった学生。くさった教授。」というテーマで――引用者補注）大学における学生教授双方の無気力さに対して一つの警告がなされました。しかし、……改善に向けての行動を起こした学生は教授はいったいかばかりいたでしょう。問題意識を失った大学はもはや「崖っぷち」状態にあるといえます。しかし、このあと一步の「崖っぷち」状態で踏み留まり、この状態を脱しなければなりません。（第三九回）

四 名大祭の運営方法

以上、約半世紀におよぶ名大祭の変遷をそのテーマに着目しながら概観を行った。以下では、そうした名大祭の運営方法等について紙幅の許す範囲で紹介しておきたい。

名古屋大学では、名大祭運営の全般的な取り決めとして「名大祭規約」が定められている。この名大祭規約は、前文

成立し、名大祭の理念は、名古屋大学学生の主体的参加の下に常時確認の努力がなされねばならない」と謳われている。名大祭における最高意志決定機関は名大祭運営会議であり、同会議は各団体からの議員で構成される。ここでの各団体とは名大祭に関係する学生諸団体のことをいい、名大祭本部実行委員会、名大祭一・二年生実行委員会、医学部鶴舞祭実行委員会、全学学生自治連合会、生協学生委員会、体育会、文化サークル連盟のそれぞれを指すものとされている。このうち名大祭本部実行委員会は、名大祭における中央執行機関として組織され、名大祭に関する全学的事務、情報宣伝および企画を行うこととされている。

また、名大祭本部実行委員会は、「名大祭における本学学生に対する責任と、大学当局への交渉団体である立場から、名大祭の円滑な運営のために」、名大祭参加規約を定めている。さらに同実行委員会は、「名大祭の運営における名古屋大学学生の主体的参加の確保と、名大祭の新たな発展を希求」して名大祭模範店出店規約を定めるとともに、「企業参入及び企業からの過度の援助を受けることによつて、学生自治の祭典である名大祭が破壊されぬよう」に名大祭企業参入規約を定めている。

以上のような名大祭本部実行委員会を中心とする各種の運営体制は、約五〇年におよぶ名大祭運営を通じて蓄積さ

と全五章（全三五条）からなるものである。その前文では、「名大祭は、我々の名古屋大学を中心とする学術活動、課外活動を保障する学生自治に対する真摯な要求の成果の下に



地域参加によるフリーマーケット

れてきたものであり、「学生自治の象徴」とされる名大祭の伝統を支えるものと考えられるのではないであろうか。

五 おわりに

名古屋大学では、この約半世紀の間、一度も途切れることなく名大祭が開催されてきた。今年が第四六回となった名大祭は、同じ名称でありながら決して同一内容のもの存在しない。これは恐らく名大祭という場が、それぞれの時代の学生にとつて一つの自己表現の場として機能していることと無関係ではないであろう。

本稿で紹介した名大祭テーマの変遷は、時代とともに移り変わる名大祭像を投影するものである。当然のことながら、各時代の名大祭像について優劣を論じるべきものではなく、その時代に応じた名大祭像が主催者たる学生によつて構築されていくことが望ましいといえる。その際、名大祭を通じて大学が地域社会に公開され、相互交流が深まる好機となる可能性が高まっている現在においては、名古屋大学固有の学風や学生文化に根ざした名大祭のあり方が強く求められていることは否定できないと思われる。このことは名古屋大学のみに限られたことではなく、おそらく他の多くの大学祭にも該当するのではないかと考えられる。